

ライバルの肯定的側面と否定的側面の検討¹⁾

太 田 伸 幸²⁾

【問題と目的】

スポーツや企業、恋愛などお互いに競っている関係を評して「ライバル」という表現を用いることがよくある。あるいは特定の相手に負けたくない而努力している人に対して、「ライバル心」を抱いているという場合がある。このように、特定の個人に対して一方的、あるいは双方向的に相手に負けたくないと思っ努力している場面において、「ライバル」という用語が使用されることが多い。

対人関係におけるライバル関係は、Deutsch (1982)によると、ライバル関係は対等で課題指向的な競争関係とされている。確かに、「ライバル」として表現される関係では、何らかの目標達成について競い合っている場合が多い。例えば、以下の記述にもそうした表現が見受けられる。

アンはたゆまず一心に勉強を続けた。ギルバートにたいする競争意識はアヴォンリーのときと変わらず激しかったが、クラスではほとんど知られていなかった。しかし、いまではアンはギルバートをうち負かそうとねがってはならず、ただ好敵手として堂々とした勝利を勝ちたいだけだった。いまではもう、この競争がなければ生きがいがないなどとは思わなかった。

(モンゴメリ『赤毛のアン』より)

この記述において、アンはギルバートをライバル(好敵手)として認知し、ギルバートに勝利することを目標として勉強を行っている。しかし、「いまではもう、この競争がなければ生きがいがないなどとは思わなかった」とあるように、勝利をすることが目標であることは変わ

らないとしても、勝つこと(競争)に対する価値の置き方は変化している。すなわち、“競争に勝つ”ことだけにこだわる姿勢からの価値観の変化があったことが推測される。それがどのような過程を経た結果であるのかについては、この箇所からは読み取ることはできないが、アンにとってのライバル(ギルバート)が存在することで、そして、ライバルとの競争を通して影響を受け、変化が生じたことは間違いないだろう。

実際のライバルに対する認知においても、こうした変化は報告されている。星野(1997)は、ライバルへのとらわれによる日常生活や練習への不適応傾向と運動技能との心身両面に問題をもつサッカー選手に対して、動作法を実施した。当初、選手には、ライバルが急速に伸びてきたのに自分は伸びないとかライバルの目が気になるといった、ライバルへのとらわれや焦りが強く見られていた。しかし、セッションが進むにつれ、ライバルは選手自身を発憤させるものとなるよう、ライバルの受け止め方が変化し、ライバルへのとらわれから脱却していったのである。

このライバルの受け止め方について、太田(1999a)は、高校生を対象とした学習場面のライバルに関する調査において、回答者の内省報告にライバルに対する考え方やライバルのとらえ方に関する記述が見られることを指摘した。そして、ライバルに対するとらえ方に個人差が存在するのではないかとしている。また、室山(1995)は、ライバルを「課題を媒介として競争する相手で、実力が同程度であり、競争によってお互いに良い影響を及ぼしあう相手」として定義しており、この定義では、ただ競争するだけの関係をライバルとして認知することは難しいことを示唆している。

太田(2001a)では、ライバルの認知理由について検討し、ライバルとの相互作用に関する意識がライバル認知に影響することを明らかにした。太田はさらにライバルを「基準」「目標」「好敵手」に分類した。「基準」とはライバルを自己評価のための基準として認知している場合であり、「目標」は自分よりも成績が上の相手を一

1) 本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会において報告された。

2) 現所属：愛知工業大学基礎教育センター

方的に目標として認知している場合である。そして、「好敵手」とは能力的に対等な相手と相互的なライバル関係を築いている場合である。このように、相互的なライバル関係を認知しているのは「好敵手」のみであり、他の2型は、実力が同程度でない場合や一方的にライバル認知を行なっている場合である。さらに太田は、この3類型で認知理由の比較を行い、「好敵手」でもっとも相互作用の影響の認知が強いことを示した。したがって、この2類型では室山の定義にあるような「お互いに良い影響を及ぼしあう」ということは考えにくい。特に、実際に認知されるライバル自体に、認知する対象の個人差が存在するため、一義的にライバルを定義するだけではライバルとはどういう存在かという検討は不十分ではないかと考えられる。そして太田(2001a)は、実際のライバルについてもそのライバルに対する認識が異なるように、ライバルを持つ生徒・持たない生徒の間のライバルに対する認識に相違があることを指摘した。これは潜在的なライバル像が個人に存在することを示唆している。

太田(2000a)は、こうしたライバルという存在に対して個人が持つ概念をライバル観として定義した。そして、この潜在的なライバル像について、大学生を対象に、ライバル関係にあると思う関係とそう思う理由について自由記述を求め、20カテゴリーに分類した。さらに数量化Ⅲ類を用いてライバル認知の基準の抽出を試み、「競争-協同」「友好-敵対」「好敵手型-宿敵型」の3軸を抽出した。「競争-協同」の軸は相手との競争関係についての軸であり、「友好-敵対」の軸は相手との対人関係についての軸である。「好敵手型-宿敵型」の軸はライバル関係の内容に関した軸である。ライバルの有無による比較を行ったところ、「友好-敵対」の軸で有意差が認められ、実際にライバルが存在する回答者は存在しない回答者に比べ、友好的にライバル関係をとらえていることを明らかにした。

さらに太田(2000b, 2000c)は、どのような関係をライバル関係であると認知するのかについて、太田(2000a)の自由記述を用いてライバル観尺度を構成し、「相互作用」「競争意識」「対等性・対照性」の3因子を抽出した。「相互作用」はライバルを協同的な存在として認知する傾向を表し、「競争意識」は競争相手として認知する傾向を表す因子である。そして「対等性・対照性」は社会的比較における類似性に相当する因子となっている。そして、ライバルが存在する回答者は「相互作用」を、ライバルが存在しない回答者よりも強く認知する傾向が示唆された。

太田(2000b, 2000c)が構成したライバル観尺度は、ライバル関係を表現する項目内容になっているが、ライ

バルがもたらす影響について記述されている項目も存在する。特に「相互作用」は、「お互いに高めあう」などの影響についての項目が多い。すなわち、ライバルという存在がもたらす影響もライバル関係を記述するために必要となる概念であると考えられる。そして、ライバルが存在するか否かにおいて、ライバル関係を友好的にとらえるか敵対的にとらえるかが異なってくる(太田, 2000a)ことから、ライバルという存在に対する価値づけ—特にライバルを肯定的にとらえているか、否定的にとらえているか—やライバルからもたらされる影響の認知も異なっていると考えられる。しかし、ライバルがもたらす影響に注目して考察を行った研究の多くは事例検討的なものであり、一般的なライバル観としての検討は行われていない。

そこで本研究では、こうしたライバルという存在が本人もしくはお互いに与える影響について、肯定的側面と否定的側面に分けて検討することを目的とする。また、太田(2000b, 2000c)で示されたライバル観との関連についても検討する。

【方法】

調査対象 愛知県内の大学生・短大生172名(男性91名, 女性81名), 平均年齢19.6歳(SD=1.04)を調査対象とした。

調査手続き 2000年12月～2001年1月に講義時間の一部を用いて講義担当者より集団実施された。回答に要した時間は15分程であった。

調査紙 以下の3つの質問項目群よりなる調査紙を作成した。

(1) ライバルの肯定的側面／否定的側面

調査対象者に「あなたは、自分にとって、もしくは人にとって『ライバル』という存在、もしくは『ライバル』という存在が身近にいることによって、人の行動や意識にどのような良い影響(肯定的な側面)・良くない影響(否定的な側面)があると思いますか」という教示を提示し、ライバルの存在がもたらす影響について、肯定的側面と否定的側面にわけて、それぞれ自由記述を求めた。回答欄は肯定的側面・否定的側面の順に提示し、それぞれ6個まで記入できるようにした。

(2) ライバル観尺度

太田(2000b, 2000c)で使用されたライバル観尺度のうち、34項目を用いた。「相互作用」「競争意識」「対等性・対照性」の3つの下位尺度より構成されている。各項目について「当てはまる(5)」～「当てはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

(3) ライバルの有無

現在ライバルが存在すると回答した調査対象者に、①何についてのライバルか、②ライバルとの成績・能力の差、③ライバル意識の方向性、④ライバルとして認知し始めた時期、について回答を求めた。ライバルの内容には自由記述を求め、ライバルとの成績・能力差には「相手の方が上」「相手の方がやや上」「同じくらい」「自分の方がやや上」「自分の方が上」から、ライバル意識の方向性には「相手もライバルだと思っている」「多分相手もライバルだと思っている」「多分自分だけがライバルだと思っている」「自分だけがライバルだと思っている」から、それぞれ当てはまるものを選択させた。そして、認知した時期には、年（もしくは学年）と月の記述を求めた。次に、高校時代の学習のライバルの有無についても回答を求め、高校時代に学習のライバルが存在したと回答した調査対象者に、①ライバルとの成績差、②ライバル意識の方向性、について回答を求めた。ライバルとの成績・能力差には「相手の方が上」「相手の方がやや上」「同じくらい」「自分の方がやや上」「自分の方が上」から、ライバル意識の方向性には「相手もライバルだと思っていた」「多分相手もライバルだと思っていた」「多分自分だけがライバルだと思っていた」「自分だけがライバルだと思っていた」から、それぞれ当てはまるものを選択させた。

【結果】

現在および高校時代のライバルの有無

現在ライバルが存在する回答者は、173名中47名（27.2%）、高校時代に学習のライバルが存在した回答者は64名（37.0%）であった（Table1）。現在のライバルの内容を太田（1999b）の分類基準³⁾に従って分類したところ、課外活動（趣味、勉強、部活動、スポーツ、バイト等）が最も多かった（Table 2）。

また、ライバル意識・能力差の結果を太田（2001a）のライバルの分類基準（基準、目標、好敵手の3類型）に当てはめてみると、いずれにおいても「好敵手」、「目標」の順に多く、「基準」は少なかった（Table 3）。

ライバル観尺度の分析

ライバル観尺度に対して因子分析（主成分分解、Promax 回転）を行い、太田（2000b, 2000c）と同様

3) 太田（1999b）では学習以外のライバルを「課外活動」（例：趣味、部活動、スポーツ、バイト等）、「人間関係」（例：恋愛、人間関係）、「特性」、「全般」に分類している。本研究では、「課外活動」に勉強を含めている。

Table 1 ライバルの有無

	現在のライバル		計
	存在する	存在しない	
高校時代の学習のライバル			
存在した	25	39	64
存在しなかった	22	86	108
計	47	125	172

Table 2 ライバルの分類

分類	人数	記述例
趣味・勉強	28 a,b	学習, スポーツ, バイト
特性	5 a,b	体力, ファッション
人間関係	5 a	恋愛
全般	9	将来の夢, 生き方
無記入	3	

a,bは同じアルファベットに含まれる回答者が1人存在することを示す

Table 3 ライバルとの成績の差とライバル認知の方向

ライバル認知の方向	成績の差			
	自分が上	同じくらい	相手が上	
一方向的	3	0	5	5 8
双方向的	1	5	9	6 3

の3因子解を抽出した。そして、全ての因子に対する負荷量が.40未満もしくは2因子以上に.30以上の負荷を示した6項目を除外し、残り28項目を以降の分析に用いた。第1因子が「相互作用」（12項目、 $\alpha = .90$ ）、第2因子が「競争意識」（8項目、 $\alpha = .89$ ）、第3因子が「対等性・対照性」（8項目、 $\alpha = .79$ ）である。

肯定的側面/否定的側面の自由記述の分類

肯定的側面についての記述は254個、否定的側面についての記述は196個得られた。これは一人あたり2.6個（肯定1.5個、否定1.1個）の記述数にあたる。肯定的側面の記述の方が多いが、これは、回答順を肯定的側面・否定的側面の順に固定しているため、回答順序による回答数の差が生じたことが考えられる。

このことを確認するために、本調査での調査対象者と

Table 4 肯定的側面・否定的側面の記述数

	肯定的側面	否定的側面	計
本調査	254	196	450
追加調査	80	68	148

$\chi^2_{(1)} = 0.13, n.s.$

Table 5 肯定的側面の分類カテゴリと記述例

カテゴリ名	記述例	記述人数	
		存在	不在
P1 お互いの能力向上	お互い刺激しあうので向上する 自分と相手をお互い高めることができる	7	18
P2 相互理解	お互いのことがよくわかる よりいい関係がつけられることもある	3	6
P3 相互援助	お互いに励ましている 互いに協力することができる	5	8
P4 内面的変化	自分の中身が出てくる 前向きになれる	5	12
P5 満足	自分にプラスになる 生活にはりがでる	1	6
P6 お互いに競争して頑張れる	刺激しあってお互いに頑張れる 切磋琢磨	3	18
P7 自分が頑張れる	ライバルに勝とうとして努力する 自分も頑張ろうと努力できる	15	28
P8 自分の能力向上・能力の発揮	人と競い合うことで自分の能力が伸びる 自分自身の能力向上	12	34
P9 自分が動機づけられる	向上心が出てくる 目標ができ、その目標に向かって頑張れる	19	39

Table 6 否定的側面の分類カテゴリと記述例

カテゴリ名	記述例	記述人数	
		存在	不在
N1 競争を大切にす	競う事ができる ライバルが落ちぶれた時、目標を失う	2	2
N2 周囲に迷惑をかける	周囲が見えなくなりライバル以外の人に迷惑をかける 周りが気にしてしまう	1	3
N3 上下関係ができる	上下関係ができてきそう いじめが発生する	4	4
N4 どちらかが傷つく	傷つくことがある 自分か相手どっちかが傷つく場合もある	0	2
N5 互いに仲が悪くなる	争いになってしまう 仲が悪くなる	4	20
N6 相手に勝つことを意識しすぎる	ライバルに勝とうとすることで、卑怯なことをしてしまう なんでも競い合ってしまう	10	36
N7 精神的なプレッシャーを受ける	自分を追いつめてしまう 他人と比較することで落ち込んだり悩んだりする	4	19
N8 自分の心に余裕がなくなる	刺激しあひすぎると、相手を思う気持ちがなくなる 意識しすぎて、本当の自分を失ってしまう	4	9
N9 相手に対する否定的影響	相手を憎らしいものと考えてしまう ねたみが生まれる	11	15
N10 負けると悪影響	負けると落ち込む 負けたときにやる気がなくなる	7	12
N11 自分の醜い面が出てくる	ライバルが失敗した時に喜んでしまう 自分の醜い部分が出てくる	2	2

は別の女子短大生45名を対象に肯定・否定の区別を設けず、「あなたは、自分にとって、もしくは人にとって『ライバル』という存在、もしくは『ライバル』という存在が身近にいることによって、人の行動や意識にどのような影響があると思いますか」という教示を提示し、ライバルの存在がもたらす影響について自由記述を求めた。回答欄は11個用意し、得られた記述を本研究で得られたカテゴリーをもとに肯定的側面と否定的側面に分類した。記述は148個（肯定的側面80個、否定的側面68個）得られ（Table 4）、この記述数と、本研究での記述数を用いて χ^2 検定を行ったところ、有意とはならなかった（ $\chi^2_{df=10}=0.13$, n.s.）ため、回答数の差は回答順序によるものではないと考えられる。

次に、得られた記述を肯定・否定それぞれ独立にKJ法の手法を用いて分類を行なった。分類は心理学専攻の大学院生3名と学部生1名で行なった。肯定的側面・否定側面ともに10カテゴリーを目安に分類を行なったところ、肯定的側面は9カテゴリー、否定的側面は11カテゴリーに分類された。カテゴリー名と記述例、ライバルの有無別の記述人数を、肯定的側面についてはTable 5、否定的側面についてはTable 6にそれぞれ示した。なお、1人の回答者が同じカテゴリーについて複数記述している場合は1人としてカウントしたため、記述人数の合計と記述数の合計は一致しない。

ライバル観尺度との関連

回答者ごとに分類カテゴリーにしたがって記述を分類し、カテゴリーに当てはまる記述がある場合を1、ない場合を0として符号化し、2進マトリックスを作成した。このマトリックスを用いて、肯定（否定）カテゴリーを説明変数、ライバル観尺度の各下位尺度を基準変数とした数量化I類による分析を行なった。肯定的側面は

Table 7に、否定的側面はTable 8に標準化されたカテゴリーウエイトをそれぞれ示した。

肯定的側面では、「相互作用」には、「お互いの能力向上」（ $\beta = .297$, $p < .001$ ）、「相互援助」（ $\beta = .152$, $p < .05$ ）、「自分が頑張れる」（ $\beta = .192$, $p < .05$ ）、「自分の能力向上・能力の発揮」（ $\beta = .255$, $p < .01$ ）、「自分が動機づけられる」（ $\beta = .292$, $p < .001$ ）が正のカテゴリーウエイトを示し、「お互いに競争して頑張れる」（ $\beta = .139$, $p < .10$ ）が有意傾向の正のカテゴリーウエイトを示した。「競争意識」には、「お互いの能力向上」（ $\beta = .197$, $p < .05$ ）、「自分が頑張れる」（ $\beta = .237$, $p < .01$ ）、「自分の能力向上・能力の発揮」（ $\beta = .216$, $p < .05$ ）が正のカテゴリーウエイトを示した。「対等性・対象性」には、「お互いに競争して頑張れる」（ $\beta = .206$, $p < .05$ ）が正のカテゴリーウエイトを、「お互いの能力向上」（ $\beta = -.263$, $p < .01$ ）、「自分の能力向上・能力の発揮」（ $\beta = -.223$, $p < .01$ ）が負のカテゴリーウエイトを示し、「相互援助」（ $\beta = .126$, $p < .10$ ）、「満足」（ $\beta = .139$, $p < .10$ ）が有意傾向の正のカテゴリーウエイトを示した。

否定的側面では、「相互作用」には「相手に勝つことを意識しすぎる」（ $\beta = .143$, $p < .10$ ）が有意傾向の正のカテゴリーウエイトを示した。「競争意識」には「上下関係ができる」（ $\beta = .176$, $p < .05$ ）、「互いに仲が悪くなる」（ $\beta = .203$, $p < .05$ ）、「相手に勝つことを意識しすぎる」（ $\beta = .201$, $p < .05$ ）、「精神的なプレッシャーを受ける」（ $\beta = .191$, $p < .05$ ）が正のカテゴリーウエイトを、「どちらかが傷つく」（ $\beta = -.174$, $p < .05$ ）が負のカテゴリーウエイトを示した。「上下関係ができる」（ $\beta = .149$, $p < .10$ ）が有意傾向の負のカテゴリーウエイトを示した。

Table 7 肯定的側面の数量化I類

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	R ²
相互作用	.297***	.044	.152*	.049	-.058	.139 ⁺	.192*	.255**	.292***	.158***
競争意識	.197*	.079	.124	-.016	.092	.134	.237**	.216*	.129	.092 ⁺
対等性・対照性	-.263**	.083	.126 ⁺	.082	-.139 ⁺	-.206*	-.153 ⁺	-.223**	.026	.148**

⁺ $p < .10$ ^{*} $p < .05$ ^{**} $p < .01$ ^{***} $p < .001$

Table 8 否定的側面の数量化I類

	N1	N2	N3	N4	N5	N6	N7	N8	N9	N10	N11	R ²
相互作用	.084	-.003	.016	.031	.042	.143 ⁺	-.034	-.005	-.066	.062	.080	.037
競争意識	.055	.060	.176*	-.174*	.203*	.201*	.191*	.071	.094	-.065	.013	.143**
対等性・対照性	.078	-.088	.149 ⁺	-.067	.022	.003	-.050	-.036	-.026	.085	-.039	.053

⁺ $p < .10$ ^{*} $p < .05$ ^{**} $p < .01$

【考 察】

ライバルの肯定的側面と否定的側面

ライバルの存在がもたらす影響について、肯定的側面では意欲や行動面での動機づけに関する記述（P6, P7, P9）や能力向上に関する記述（P8）が多く、競争を行うことによる意欲や行動の促進効果が、ライバルが存在することにより個人が好ましいと認知する影響であるといえよう。否定的側面では対人感情の悪化に関する記述（N5, N9）や精神的プレッシャーに関する記述（N6, N7）が多く見られ、いずれも“競争に勝つ”ことにこだわることにより、対人認知や個人の意識に悪影響がもたらされると認知していることを表している。

肯定的側面と否定的側面において競争に対する考え方が異なっており、これは太田（2001b）の競争心の分類に対応している。太田は競争心を手段型競争心と目標型競争心に分類した。手段型競争心とは、自己成長や意欲の促進をはかるために競争を行おうとする意識を表し、目標型競争心とは、競争の結果にこだわる意識を表す。したがって、ライバルの肯定的側面の記述は太田の手段型競争心に、否定的側面の記述は目標型競争心にそれぞれ対応するといえよう。手段型競争心は自己成長動機と正の相関を持つことが示されており（太田, 2003a）、ライバルの肯定的側面は、自己成長を促進する存在としてのライバルの影響を反映したものと考えられる。また、否定的側面の記述の特徴として、過剰なライバル意識をもつことによる悪影響に関する記述が見られた（例「ライバル意識を持ちすぎると、相手を引きずり下ろそうとする」）。目標型競争心が過競争心と正の相関を持つ（太田, 2003b）ことから明らかであろう。

過競争心による否定的な影響については、星野（1997）や文野（1999）などの実際のライバル認知を扱った事例においても見られる。星野は、ライバルに対する過剰なとらわれ（ライバルに勝たなければならない）から不適応を生じ、そのとらわれから解放される（ライバルは自分を発奮させる存在であると認知する）ことによって、不適応状態から脱したスポーツ選手の事例を報告した。文野は、自分と似た境遇をもつ留学生仲間に対して過剰なライバル視を持ち、相手に負けないことを目標として、日本での留学生生活を送った留学生の事例を報告した。どちらにおいても、相手に勝つことを意識しすぎることによって不適応を起こしたり自分を見失っていたりしている。自分が打ち込みたいもの（ここではサッカーや勉強）よりもライバルに意識が向いてしまっているのである。しかし、ライバルへのとらわれから脱却することによって、ライバルが自己成長をもたらす存在へと変

化している。したがって、適度なライバル意識は自己成長に良い影響を与える存在として肯定的意味合いを持つが、過剰なライバル意識（勝つことにこだわる意識）を持つと加えて対人認知や対人関係に悪影響をもたらすと考えられる。

ライバル観尺度との関連

肯定的側面では「相互作用」、「対等性・対照性」に対する影響が強かった。「相互作用」に対して、能力向上（P1, P8）や動機づけ（P9）、行動面の変化（P6, P7）など、本人やお互いに対する促進的な効果をもたらす記述のカテゴリーウエイトが高く、ライバル関係の相互作用の面をより意識していると考えられる。すなわち、自己成長に良い影響をもたらす存在としてライバルを認知していると、ライバル関係は2者間の促進的な相互作用によって認知されるといえよう。また、「対等性・対照性」では、カテゴリーウエイトが負であり、類似性が基準とはなりにくいことを示唆している。

否定的側面では「競争意識」に対する影響が強かった。記述数の多い、互いに仲が悪くなる（N5）、相手に勝つことを意識しすぎる（N6）、精神的なプレッシャーを受ける（N7）のカテゴリーウエイトが高く、ライバルの存在の影響として、競争に勝つことを意識しすぎることによる悪影響を記述した回答者は、相手に対する競争意識をライバル関係の基準として認知しやすいといえよう。

以上をまとめると、ライバル関係の認知は、ライバルという存在がもたらす影響の認知と関係が深く、肯定的側面の自己成長にかかわる意識が高いと、相互作用の側面をライバル関係の認知基準として重視し、否定的側面の勝敗にこだわる意識が高いと、競争意識をライバル関係の認知基準として重視するようになるといえる。

まとめと今後の課題

本研究では自由記述を用いた検討を行なったことにより、個人がライバルの影響について様々な認知を持っていることが明らかとなった。特に、競争関係とみなされるライバル関係にあっても、競争の勝敗だけにこだわるわけではなく、ライバルが存在することによって自己成長がもたらされると認知していることが示された。

しかし、一人あたりの自由記述数が少ないため、数量化I類の説明率も低くなってしまい、十分な検討が行なえなかった。したがって、ライバルの肯定的側面・否定的側面について、個人のライバル観をより深く測定し、検討する必要がある。

また、ライバルの肯定的側面、否定的側面のそれぞれについての検討は行ったが、星野（1997）の事例のようなライバル観の変化については考察できなかった。本研究で、競争心の強さ（手段型競争心・目標型競争心）に

より、ライバルのとらえ方(肯定的・否定的)や、自身自身に対する影響が異なってくる事が明らかとなった。今後、こうしたライバル観の変化による、ライバルに対する個人の認知面・行動面での変化に注目して検討を進める必要がある。

【引用文献】

- 文野峯子 1999 学習過程における動機づけの縦断的研究—インタビュー資料の複眼的解釈から明らかになるもの—人間と環境—人間環境学研究所研究報告, 3, 35-45.
- Deutsch, M. 1982 Interdependence and psychological orientation. In Derlega, V.L. & Grzelak, J.(Eds.) *Cooperation and helping behavior*. Academic Press. chap.2, 15-42.
- 星野公男 1997 メンタルアクティベーション—動作法によってライバルへのとらわれから脱却し、自信を回復したサッカー選手—心理臨床学研究, 15, 225-236.
- モンゴメリ, L.M. 村岡花子(訳) 1992 赤毛のアン 新潮社
- 室山晴美 1995 ライバルとして記述される対人関係に関する一考察—心理学研究, 65, 454-462.
- 太田伸幸 1999a 学習活動におけるライバルの意味—ライバル認知の分析を通して—名古屋大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)
- 太田伸幸 1999b 学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討—名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 275-285.
- 太田伸幸 2000a ライバル関係の認知の基準—大学生の自由記述の分析から—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 47, 197-204.
- 太田伸幸 2000b ライバル関係の認知の基準(2)—大学生のライバル観の測定—日本グループダイナミクス学会第48回大会発表論文集, 10-11.
- 太田伸幸 2000c ライバル関係を認知する基準の検討—高校生の持つライバル観の測定より—日本性格心理学学会第9回大会発表論文集, 30-31.
- 太田伸幸 2001a 学習におけるライバルを認知する理由の検討—性格心理学研究, 10, 45-57.
- 太田伸幸 2001b 競争概念の再検討—競争心の測定に関するレビュー—名古屋大学教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 48, 301-313.
- 太田伸幸 2003a 競争目標目録(COI)に関する基礎的検討—日本グループ・ダイナミクス学会第50回大会発表論文集, 48-49.
- 太田伸幸 2003b 競争心の構造に関する検討—競争目標目録(COI)との関連—日本社会心理学学会第44回大会発表論文集, 562-563.

(2003年9月30日 受稿)

ABSTRACT

Examination of the Affirmative Influence of a Rival, and Negative Influence

Nobuyuki OTA

The purpose of this study is dividing into affirmative influence and negative influence and considering the influence which the existence of a rival has on him or each other. The relation of affirmative influence and a view of rival are also considered. Open-ended question paper was carried out for 172 undergraduates, and 254 descriptions about affirmative influence were obtained, and 196 descriptions about negative influence were obtained. Using the KJ method, the affirmative influence was classified into 9 categories and the negative influence classified into 11 categories. Although moderate rival consciousness has affirmative implications as existence which has good influence for self-growth, if it has superfluous rival consciousness, a bad influence will be brought to personal cognition and personal relations on the contrary, When the consciousness in connection with self-growth of the affirmative side was high, the side of an interaction was thought as important as a rival-related cognitive standard, and when the consciousness adhering to the victory or defeat of the negative side was high, it became clear to think a sense of rivalry as important as a rival-related cognitive standard.

Key words: rival, view of rival, affirmative influence and negative influence of a rival, open-ended question